

と、おっしゃるのです。

清平さんは、仏さまを背負うと、急いで尾花の長禅寺に向かいました。一方長禅寺の竹庵和尚も同じ夢を見て、金谷へ尋ねて来られるところで、二人は途中でばったり出会ったのでした。こうして仏さまが長禅寺に移られると、お参りの人々で大変にぎわいました。

時はうつり、今は、涅槃会に一日だけお厨子の扉が開かれて、お釈迦さまの尊い像が拝めるのです。黒漆塗りの伏目がちにやさしく微笑んでおられるお姿に、人々は親しみをこめて、黒仏さまと呼んでいます。

さて、涅槃会の最後には、赤、黄、緑というどり美しいお釈迦団子がまかれます。お団子は、尾花の子供たちが鈴を持って、

「脇之谷、長禅寺、涅槃の勧め。」



と、唱えながら托鉢した米で作られるのですが、托鉢は必ず清平さんでお経をよんでからはじめる習わしでした。このお釈迦団子を身につけていると、蛇にかまれないといわれて、子どもたちは綺麗な布袋にいれて、腰にさげていたものです。

31 金部連

もう五・六百年も昔のことで、詳しいことはとんとわかりませんが、金谷に金部連という人が住んでいました。連といいますが、きっと古くからの豪族だったのでしょう。



この人は、とてもすぐれた人物で、村人からは「越士の流」と云われておりました。盛んなものも必ず滅びるといふ諺どおり、朝倉氏が一乗谷に城を築いたころに滅んでしまったということなのです。